# 君がくれたもの。僕があげたもの。

紫煙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君がくれたもの。僕があげたもの。

【Ｎコード】
Ｎ３７４９Ｔ

【作者名】
紫煙

【あらすじ】
君がくれたもの。
僕は君の笑顔で知った。
僕があげたもの。
僕は君の涙で知った。
大好きな、大切な君のために。
いつか、僕は笑うから・・・

君がくれたのは優しさ。
じゃあ、僕があげたものは・・・何？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ねぇアラタ。君が居てくれるだけで、ボクは幸せだよ。」
「だからね。君も僕と一緒のときは、幸せだって思ってほしいなぁ。」
アカリは笑って言う。
白い目で。白い服を着て。白い部屋の中で。
赤い線を、細い腕につけて。

自らを「ボク」と呼ぶアカリは、れっきとした女の子。
その瞳には、僕の色はもう写っていない。

そう。彼女はもうすぐ真っ白に溶けてしまうんだ。

医者にすら分からない奇病。
彼女の親は告知しないでくれと医者に頼んだ。
でも。彼女には自分の最期が分かっているらしかった。

彼女は笑う。ココロで時を刻みながら。
かつてきちんと色を写した綺麗な瞳は、白くなってもなお
僕は美しいと思ってしまうほどだった。

「アラタ、外に行きたいよ」
「アラタ、何か歌ってよ」
「アラタ、アラタ・・・」

彼女のわがままに、僕は出来る限り付き合った。
そうして、笑ってくれる彼女の笑顔が自由だったから。
僕も楽しくて。自由な空間に居られる気がした。

「ボク、アラタが好きだよ」

僕もアカリが大好きだ。いや、愛しているの方がいいかもしれない。

ふと気づいた。彼女は僕の前で泣かないことを。
僕は彼女の涙も好きになる自信があったから・・・

「アカリ、怖くないの？ココを離れること。僕の傍から居なくなること

この、世界から溶けてしまうこと。」

何の前置きもなく、屋上から空を見上げるアカリに聞いた。
アカリは目を見開いて、僕を見た。
僕を写すことはない、その目で僕をしっかり捉えて離さなかった。

「君が本気でそれを聞いてるなら、ボクは今すぐココから飛び降りるよ」

笑顔だった。
違う。作り笑いだ。
アカリは作り笑いが苦手だから、すぐ分かる。

目の奥が笑っていない。

ゴメンと一言謝ったけれど、それきり彼女は返事をしてくれなくなった。

次の日、彼女の部屋に行くとすぐに「帰れ」と拒否された。

そんな日が3日ほど続き、何とか謝りたくて夕方に彼女の部屋を訪れた。

夕焼けが好きな彼女が、機嫌を直してくれると思ったから。

「もういいよ。」

僕が謝ると、彼女はいつもどおりの口調で。僕に目を向けずに許すと言った。

「あの質問の答え、教えてあげる。」

夕焼けを見つめながら彼女は続けた。

「怖いよ。怖くて仕方ないよ。
白い世界しか視えなくなったときから
自分がそのうち消えちゃうって知ったときから
ずっとずっと、怖いんだよ。

それでも笑えるのはね。

君が居るからだよ。アラタ。」

そういいながら彼女は振り向く・・・
泣いてた。表情は笑っていたけど。白い頬に幾重もの涙の後が残っていた。

僕は彼女を抱きしめた。
ゴメンと何度も何度も言った。

僕は彼女の生きる意味だった。
僕が彼女に与えていたものを、僕は彼女の涙で知った。

「アラタと一緒に居たい。アラタの笑顔が見たい。アラタの綺麗な目が見たい。
離れたくないに決まってるじゃない・・・なんで。
なんで一緒に居させてくれないの・・・・白になんてなりたくない・・・」

泣きじゃくる彼女を見ながら、彼女のつややかな髪を撫で、僕も泣いた。

その夜、彼女は白になって闇に溶けていった。
その冷たい感触を僕は忘れることが出来なかった・・・
白になる前、彼女は僕に言った。
「ねえアラタ。ボクが白になっても・・・ボクはそばにいるよ。
だから、アラタは笑っていてね。たくさんの色をボクに見せてね。

大好きな人と出会って、大好きだと思える場所を作って、それをボクに見せてね。

ボクはずっと、アラタの傍に居るから。だから、約束。」

それが最後の言葉であり、最後の笑顔だった。

アカリ。あの時は、「わかった」って言えたけど。
今は少しだけ、アカリとの過ごした日々の余韻に浸っていいかな・・・
すぐに前を向くなんて・・・僕には出来そうもない・・・
君が笑顔になれるように、僕もすぐ笑えるようになるから・・・
今は、白く溶けた君を写していたい・・・

大好きだよ。僕にたくさんの優しさをくれた、アカリ。
ありがとう。

## （後書き）

悲恋を書いてみたくて、こうなりました。

さよならをするのはつらいです。
消える側も。残る側も。それぞれに辛いのです。
それでも笑おうと思えるのは、お互い信頼できるから。
誰にも渡したくない。離れたくない。でも相手の幸せを願う・・・

もっとも難解な矛盾の優しさ。

どうかコレを読まれた方が、愛する方と幸せなときを紡がれますように。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3749t/

君がくれたもの。僕があげたもの。

2011年10月9日01時22分発行